

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 10-045911
(43)Date of publication of application : 17.02.1998

(51)Int.Cl. C08G 75/02
C08G 75/10
C08G 75/20

(21)Application number : 08-201771 (71)Applicant : DAINIPPON INK & CHEM INC
(22)Date of filing : 31.07.1996 (72)Inventor : KAWABATA TAKAHIRO
FUJIWARA MAKOTO
INOUE TOSHIO

(54) METHOD FOR PURIFYING POLYARYLENE SULFIDE

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a purification method for producing a polyarylene sulfide having low metal ion content and excellent in physical properties such as color after melting with relatively simple equipment.

SOLUTION: This method comprises adding an inorganic and/or organic acid to a slurry obtained after completion of the reaction of a dihalo aromatic compound with a sulfidating agent in an organic polar solvent, and the slurry containing the solvent and a polyarylene sulfide, etc., to effect cleaning under agitation, and then subjecting the mixture to processings such as filtration, water washing, and drying, thus purifying a polyarylene sulfide polymer. The amount of an inorganic and/or organic acid added is controlled so as to give a pH of the slurry of above 7, and water washing is performed at 100° C or higher at least once.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 18.07.2003

[Date of sending the examiner's decision of rejection] 31.03.2005

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-45911

(43)公開日 平成10年(1998)2月17日

(51)Int.Cl. [*]	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
C 08 G 75/02	NTX		C 08 G 75/02	NTX
75/10	NTW		75/10	NTW
75/20	NTV		75/20	NTV

審査請求 未請求 請求項の数6 OL (全 8 頁)

(21)出願番号 特願平8-201771	(71)出願人 大日本インキ化学工業株式会社 東京都板橋区坂下3丁目35番58号
(22)出願日 平成8年(1996)7月31日	(72)発明者 川端 隆広 大阪府岸和田市額原町242-5-605 (72)発明者 藤原 誠 大阪府堺市並松町19 (72)発明者 井上 敏夫 大阪府阪南市舞3-10-31 (74)代理人 弁理士 高橋 勝利

(54)【発明の名称】 ポリアリーレンスルフィドの精製方法

(57)【要約】

【課題】 金属イオン含有量が少なく、溶融後のカラー等の物性に優れるP A Sを比較的簡便な装置で製造するための精製方法を提供する。

【解決手段】 有機極性溶媒中で、ジハロ芳香族化合物とスルフィド化剤とを反応させて得られた反応終了後の有機極性溶媒とポリアリーレンスルフィド等を含むスラリーに無機酸及び/または有機酸を加え、攪拌洗浄した後、濾過、水洗、乾燥等の処理を行ってポリアリーレンスルフィドポリマーを精製する方法において、スラリーのpHが7を越えるように無機酸及び/または有機酸の量をコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は100℃以上で行うことを特徴とするポリアリーレンスルフィドポリマーの精製方法。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 有機極性溶媒中で、ジハロ芳香族化合物とスルフィド化剤とを反応させて得られた、反応終了後の有機極性溶媒とポリアリーレンスルフィドを含むスラリーに、無機酸及び／または有機酸を加え、攪拌洗浄した後、濾過、水洗、乾燥等の処理を行ってポリアリーレンスルフィドポリマーを精製する方法において、スラリーのpHが7を越えるように無機酸及び／または有機酸の量をコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は100℃以上で行う事を特徴とするポリアリーレンスルフィドポリマーの精製方法。

【請求項2】 無機酸及び／または有機酸を加えてコントロールするスラリーとして、pHが7を越え9以下のスラリーである請求項1記載の精製方法。

【請求項3】 水洗を少なくとも1回は160℃以上で行う請求項1あるいは2記載の精製方法。

【請求項4】 水洗に用いる水が、金属イオン含有量5ppm以下の水である請求項1～3のいずれか記載の精製方法。

【請求項5】 該ポリアリーレンスルフィドが、ポリフェニレンスルフィドであることを特徴とする請求項1～4のいずれか記載の精製方法。

【請求項6】 該有機極性溶媒が、N-メチル-2-ピロリドンであることを特徴とする請求項1～5のいずれか記載の精製方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、ポリフェニレンスルフィド（以下P P Sと略称する）に代表されるポリアリーレンスルフィド（以下P A Sと略称する）の精製方法に関するものである。

【0002】 さらに具体的には、本発明は、反応終了後のスラリーに無機酸及び／または有機酸を加えることによりスラリーのpHを特定範囲にコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は特定温度以上で行うことにより、金属イオン含有量が少なく、溶融後のカラー等の物性に優れるP A Sを比較的簡便な装置で製造するための精製方法を提供するものである。

【0003】

【従来の技術】 P P Sに代表されるP A Sは、耐熱性、成形加工性等に優れる性質の活用でその成形物は、近年、電子電子部品、自動車部品等に幅広く利用されている。しかしながら電気電子部品等を中心にその高純度化が更に求められ、特に、Naイオンを主とする金属イオンの含有量の低減化が望まれている。

【0004】 金属イオンを低減化する手段として、酸を用いない方法としては、例えば、（1）特開昭60-210631号公報、特開昭62-185718号公報、特開昭59-217728号公報、特開昭59-219331号公報等に開示されているが、しかしながらこれ

らの方法は煩雑であり、充分満足すべき結果を得ることは少なかった。

【0005】 また、金属イオンを低減化する優れる手段として、酸を用いる方法が従来より知られており、例えば、（2）特開昭62-223232号公報には、反応終了後の極性溶媒を含んだP P Sのスラリーに無機酸または有機酸を加え、pH6以下で攪拌洗浄し、濾過、水洗、乾燥することを特徴とするP P Sの精製方法が開示されている。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】 確かにこの方法（2）では、酸を加えない場合に比べて、アルカリ金属イオンを低減化できるが、得られたポリマーを溶融した際にガスが発生する、着色が激しい、またpHを6以下にするために酸対応の特殊な装置が必要である等の問題があった。

【0007】 本発明は上記の従来の製法の欠点を解決して、金属イオン含有量が少なく、溶融時のカラー等の物性に優れるP A Sを比較的簡便な装置で製造するための精製方法を提供することを目的とする。

【0008】

【課題を解決するための手段】 本発明者らは上記目的を達成すべく鋭意検討した結果、金属イオン含有量が少なく、溶融時のカラー等の物性にも優れるP A Sを比較的簡便な装置で製造するためには、反応後のスラリーを特定範囲のpHにコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は100℃以上で行うことが重要であることを見い出し、有機極性溶媒中で、ジハロ芳香族化合物とスルフィド化剤とを反応させて得られた、反応終了後の、有機極性溶媒とポリアリーレンスルフィド等を含むスラリーに無機酸及び／または有機酸を加え、pHが7を越えるようにコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は100℃以上で行って精製することにより、比較的簡便な装置で金属イオン含有量が少なく、溶融時のカラー等の物性にも優れるP A Sが製造できることを見い出し、本発明を完成するにいたった。

【0009】 即ち本発明は、有機極性溶媒中で、ジハロ芳香族化合物とスルフィド化剤とを反応させて得られた反応終了後の有機極性溶媒とポリアリーレンスルフィドを含むスラリーに無機酸及び／または有機酸を加え、攪拌洗浄した後、濾過、水洗、乾燥等の処理を行ってポリアリーレンスルフィドポリマーを精製する方法において、スラリーのpHが7を越えるように無機酸及び／または有機酸の量をコントロールし、かつ水洗を少なくとも1回は100℃以上で行うことを特徴とするポリアリーレンスルフィドポリマーの精製方法を提供する。

【0010】 従来の、精製時に酸を加えpHを6以下にする場合には、溶融した際にガスが発生する、着色が激しいというようなポリマーの物性面でも問題があるし、また、酸対応の特殊な装置が必要であるが、本発明の方

法では、pHが7を越えるので酸対応のような特殊な装置を必要としないし、高温での水洗を組み合わせることにより金属イオン含有量が少なく、かつ溶融時の安定性にも優れたポリマーを得ることが可能である。即ち、本発明は従来の方法とは全く異なった方法である。

【0011】

【発明の実施の形態】本発明において「スルフィド化剤」、「ジハロ芳香族化合物」、及び「溶媒」という用語は、言及されている各化合物ないし物質がそれぞれ定義された範囲内で混合物である場合を包含する。例えば、「ジハロ芳香族化合物」が複数種の化合物からなっていて生成PASが共重合体である場合を本発明は1つの具体例として包含するものである。

【0012】(重合体の製造) 本発明におけるPASの製造方法は、スルフィド化剤によるジハロ芳香族化合物の脱ハロゲン化／硫化反応に基くものであり、各種の公知の方法を用いることが可能である。

【0013】(スルフィド化剤) 本発明において用いられるスルフィド化剤としては、例えばアルカリ金属硫化物、アルカリ金属水硫化物、あるいはこれらの混合物等が挙げられる。

【0014】 前記アルカリ金属硫化物としては、例えば、硫化リチウム、硫化ナトリウム、硫化カリウム、硫化ルビジウム、硫化セシウム等が挙げられるが、これらはそれぞれ単独で用いてもよいし、2種以上を混合して用いてもよい。また、上記硫化アルカリ金属は無水物、水和物、水溶液のいずれを用いてもよい。

【0015】 上記硫化アルカリ金属の中では硫化ナトリウムと硫化カリウムが好ましく、特に硫化ナトリウムが好ましい。

【0016】 これら硫化アルカリ金属は、例えば水硫化アルカリ金属とアルカリ金属塩基、硫化水素とアルカリ金属塩基とを反応させることによっても得られるが、反応系外で調製されたものを用いてもかまわない。

【0017】 アルカリ金属水硫化物としては、例えば水硫化リチウム、水硫化ナトリウム、水硫化カリウム、水硫化ルビジウム、水硫化セシウム等が挙げられるが、これらはそれぞれ単独で用いてもよいし、2種以上を混合して用いてもよい。また、上記水硫化アルカリ金属は、

無水物、水和物、水溶液のいずれを用いてもよい。

【0018】 上記水硫化アルカリ金属の中では水硫化ナトリウムと水硫化カリウムが好ましく、特に水硫化ナトリウムが好ましい。

【0019】 これら水硫化アルカリ金属は、硫化水素とアルカリ金属塩基とを反応させることによっても得られるが、反応系外で調製された物を用いてもかまわない。

【0020】 アルカリ金属塩基としては、例えば水酸化アルカリ金属があげられる。水酸化アルカリ金属としては、例えば水酸化リチウム、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化ルビジウム、水酸化セシウム等が挙げられるが、これらはそれぞれ単独で用いてもよいし、2種以上を混合して用いてもよい。

【0021】 上記水酸化アルカリ金属化合物の中では水酸化リチウムと水酸化ナトリウムおよび水酸化カリウムが好ましく、特に水酸化ナトリウムが好ましい。

【0022】 なお上記のいずれの場合にも、硫化アルカリ金属、水硫化アルカリ金属中に微量存在する不純物を除去するために、アルカリ金属塩基を少量過剰に加えてもさしつかえない。

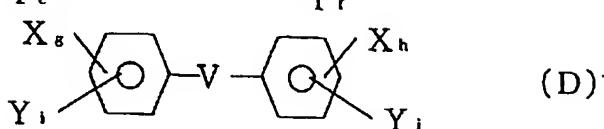
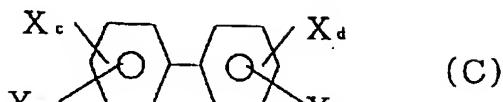
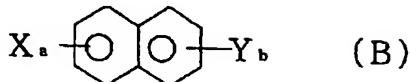
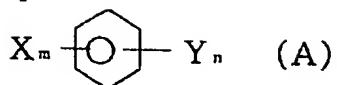
【0023】 上記スルフィド化剤は無水物でもかまわないが、入手の容易性と反応の制御性から等から含水物が好ましく、無水物を使用する場合には、水を加えて用いる。

【0024】(ジハロ芳香族化合物) 芳香族スルフィド重合体の骨格を形成すべき单量体に相当するジハロ芳香族化合物は、芳香族核と該核上の2ヶのハロ置換基とを有するものである限り、そしてアルカリ金属硫化物等のスルフィド化剤による脱ハロゲン化／硫化反応を介して重合化しうるものである限り、任意のものが使用できる。従って、芳香族核は芳香族炭化水素のみからなる場合の外に、この脱ハロゲン化／硫化反応を阻害しない各種の置換基を有するものであってもよい。

【0025】 具体的には、本発明において使用されるジハロ芳香族化合物の例には下式(A)～(D)で示される化合物が包含される。

【0026】

【化1】



【0027】ここで各置換基は下記の意味を持つ。

X : Cl、Br、I または F。特に、Cl 及び Br より成る群から選ばれた少なくとも 1 種のハロゲン。

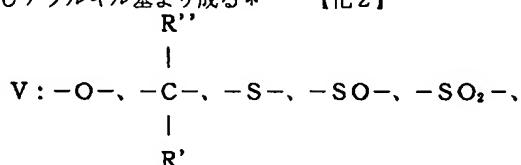
【0028】Y : -R、-OR、-COOR、-COO-

Na、-CN及び-NO₂ (Rは、H、アルキル基、シクロアルキル基、アリール基及びアラルキル基より成る*

* 群から選ばれたもの) より成る群から選ばれたもの。ここで、アルキル基又はアルキル基部分は炭素数 1 ~ 18 度、アリール基またはアリール基部分は炭素数 6 ~ 18 度のものがふつうである。

【0029】

【化2】



-C- 及び -Si-



【0030】(R' 及び R'') は、H、アルキル基、シクロアルキル基、アリール基及びアラルキル基より成る群から選ばれたもの) より成る群から選ばれたもの。ここでアルキル基またはアルキル基部分及びアリール基またはアリール基部分は上記と同様に定義される。

【0031】式 (A) 中で m 及び n は、それぞれ m = 2、0 ≤ n ≤ 4 の整数。式 (B) 中で a 及び b は、それぞれ a = 2、0 ≤ b ≤ 6 の整数。式 (C) 中で c、d、e 及び f は、それぞれ 0 ≤ c ≤ 2、0 ≤ d ≤ 2、c + d = 2、0 ≤ e、f ≤ 2 の整数。

【0032】式 (D) 中で g、h、i 及び j は、それぞれ 0 ≤ g ≤ 2、0 ≤ h ≤ 2、g + h = 2、0 ≤ i、j ≤ 2 の整数。

【0033】上記一般式のジハロゲン置換基芳香族化合物の例として、次のようなものがある。

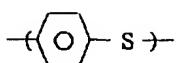
【0034】p-ジハロベンゼン、m-ジハロベンゼン、o-ジハロベンゼン、2, 5-ジハロトルエン、1, 4-ジハロナフタリン、1-メトキシ-2, 5-ジハロベンゼン、4, 4'-ジハロビフェニル、3, 5- 50

ジハロ安息香酸、2, 4-ジハロ安息香酸、2, 5-ジハロニトロベンゼン、2, 4-ジハロニトロベンゼン、2, 4-ジハロアニソール、p, p'-ジハロジフェニルエーテル、4, 4'-ジハロベンゾフェノン、4, 4'-ジハロジフェニルスルホン、4, 4'-ジハロジフェニルスルホキシド、4, 4'-ジハロジフェニルスルフィド等であり、なかでも、p-ジハロベンゼン、m-ジハロベンゼン、4, 4'-ジハロベンゾフェノンおよび 4, 4'-ジハロジフェニルスルホンが好ましく、その中でも p-ジクロルベンゼン、m-ジクロルベンゼン、4, 4'-ジクロルベンゾフェノンおよび 4, 4'-ジクロルジフェニルスルホンは特に好適に使用される。

【0035】ジハロ芳香族化合物の適当な選択組合せによって 2 種以上の異なる反応単位を含む共重合体を得ることができることは前記した通りである。p-ジクロルベンゼンと 4, 4'-ジクロルベンゾフェノンもしくは 4, 4'-ジクロルフェニルスルホンとを組み合わせて使用すれば、

【0036】

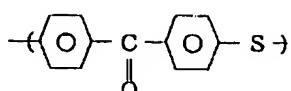
【化3】



【0037】単位と

【0038】

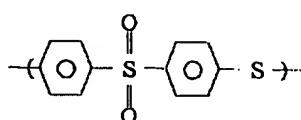
【化4】



【0039】単位もしくは

【0040】

【化5】



【0041】単位とを含んだ共重合物を得ることができ
る。

【0042】但し、共重合することは可能ではあるが、
p-ジハロベンゼンをジハロ芳香族化合物中70モル%
以上、好ましくは90モル%以上、更に好ましくは95
モル%以上用いて重合すると種々の物性に優れたPPS
が得られるので好ましい。

【0043】本発明で使用するジハロ芳香族化合物の使
用量は、使用するスルフィド化剤中の硫黄源1モル当
り0.8~1.3モルの範囲が望ましく、特に0.9~
1.10モルの範囲が物性の優れたポリマーを得るのに
好ましい。

【0044】なお、本発明によるPASは、上記ジハロ
芳香族化合物の重合体であるが、生成重合体の末端を形
成させるため、あるいは重合反応ないし分子量を調節す
るためにモノハロ化合物（必ずしも芳香族化合物でなく
ともよい）を併用することも、分岐または架橋重合体を
形成させるためにトリハロ以上のポリハロ化合物（必ず
しも芳香族化合物でなくともよい）を併用することも可
能である。

【0045】これらのモノハロまたはポリハロ化合物が
芳香族化合物である場合の具体例は、上記具体例のモノ
ハロまたはポリハロ誘導体として当業者にとって自明で
あろう。具体的には、例えばジハロベンゼンに若干量の
トリクロロベンゼンを組み合わせて使用すれば、分岐を
持ったフェニレンスルフィド重合体を得ることができる。

【0046】また、モノハロまたはポリハロ化合物の使
用量は、目的あるいは反応条件によって異なるので一
概に規定できないが、ジハロ芳香族化合物1モルに対し
て好ましくは0.1モル以下、更に好ましくは0.05
モル以下である。

【0047】（溶媒及び水）本発明の重合反応に使用す 50 【0053】一般に、本発明の重合反応中に存在させる

る有機極性溶媒は、公知慣用のものが使用できるが、活性水素を有しない有機極性溶媒、すなわちアプロチックタイプの有機極性溶媒が好ましい。

【0048】この有機極性溶媒は、本発明重合反応を不
当に阻害するものであってはならない。また、この溶媒
は、少なくとも原料であるジハロ芳香族化合物及びS²⁻
を与えるスルフィド化剤を反応に必要な濃度に溶解する
ことができる程度の溶解能を持つものであるべきであ
る。

10 【0049】従って、この溶媒は、窒素原子、酸素原子
および/または硫黄原子を有する極性溶媒であることが
普通である。更に、この溶媒は原料ジハロ芳香族化合物
と同様な脱ハログン化/硫化反応に関与しうるものでな
いことが望ましい。従って例えばハロ芳香族炭化水素で
はないことが望ましい。また、本発明の製造方法では、
使用する溶媒の沸点は水の沸点より高いものが最適であ
る。

【0050】このような溶媒の具体的例を挙げれば、
(1) アミド、たとえば、ヘキサメチルリン酸トリアミ

ド(HMPA)、N-メチル-2-ピロリドンの様なN
-メチルピロリドン(NMP)、N-シクロヘキシリピ
ロリドン(NCP)、N-メチルカプロラクタム、テト
ラメチル尿素(TMU)、ジメチルホルムアミド(DM
F)、ジメチルアセトアミド(DMA)、その他、

(2) エーテル化ポリエチレングリコールたとえばポリ
エチレングリコールジアルキルエーテル(重合度は20
00程度まで、アルキル基はC₁~C₂₀程度)など、

(3) スルホキシド、たとえばテトラメチレンスルホキ
シド、ジメチルスルホキシド(DMSO)その他、があ
る。前記各種の溶媒の中でも、N-メチルカプロラクタ
ムおよびNMPは、化学的安定性が高いので、特に好ま
しい。

【0051】溶媒の使用量は、使用する溶媒の種類によ
っても異なるが均一な重合反応が可能な反応系の粘度を
保持すること、また、ある程度の生産性を維持するため
には、重合に用いるスルフィド化剤中の硫黄源1モル当
り1.0~6モルの範囲が好ましい。また、生産性を更
に考慮すると、重合に用いるスルフィド化剤中の硫黄源
1モル当たり1.2~5.0モルの範囲が好ましく、また、
更に好ましい使用溶媒量は重合に用いるスルフィド化
剤中の硫黄源1モル当たり1.5~4モルである。

【0052】重合系内の水分量、あるいはスルフィド化
剤の含水量を調整するための水は、反応を阻害するもの
が含まれていなければ良く、そのため蒸留水、イオン交
換水等、反応を阻害するアニオンやカチオン等を除いた
水が好ましい。また、水洗工程において用いる水も金属
イオン含有量が5ppm以下の水が好ましく、そのた
め、例えば蒸留水、イオン交換水等を用いるのが好ま
しい。

べき水分は、加水分解反応などの併発を回避させるために、なるべく少ない方がよい。しかしながら、使用するスルフィド化剤が水和物等である場合には、スルフィド化剤を有機極性溶媒中で加熱脱水してもスルフィド化剤1モルに対して1モル以上は系内に残存てしまい、系内の水分を減らすことは困難であり、系内の水分量はスルフィド化剤1モル当たり1~2モル、好ましくは1~1.5モルである。

【0054】(重合) 本発明による重合は、必要に応じて脱水操作を行った後、あるいは脱水操作を行いながら200~300℃、好ましくは210~280℃の温度に加熱して0.1~40時間、好ましくは0.5~20時間、更に好ましくは1~10時間加熱して行なうことが好ましい。この範囲内であると反応の進行がスムーズである。

【0055】すなわち、この反応温度が200℃未満では反応速度が遅く、また反応が不均一になる可能性があり、一方、300℃を超えると生成ポリマーあるいは溶媒の分解等の副反応が起こりやすい。

【0056】また、反応時間は使用した原料の種類や量、あるいは反応温度に依存するので一概に規定できないが、0.1時間未満では未反応成分の量が増大したり生成するポリマーが低分子量になる可能性が高く、また40時間以上では生産性が悪く好ましくない。

【0057】本発明の重合反応においては、接液部がチタンあるいはクロムあるいはジルコニウム等でできた重合缶を用い、通常、窒素、ヘリウム、アルゴン等の不活性ガス雰囲気下で行なうことが好ましく、特に、経済性及び取扱いの容易さの面から窒素が好ましい。

【0058】反応圧力については、特に制限はないが、使用した原料及び溶媒の種類や量、あるいは反応温度等に依存するので、適宜条件を選択して採用する様にする。

【0059】また、反応液の調整及び共重合体の生成反応は一定温度で行なう1段反応でもよいし、段階的に温度を上げていく多段階反応でもよいし、あるいは連続的に温度を変化させていく形式の反応でもかまはない。

【0060】(精製) 本発明の最大の特徴は、この精製工程にある。例えば、上記の様にして得られた有機極性溶媒とポリアリーレンスルフィドを含む反応終了後のスラリーが、精製に供せられる。このスラリーは、通常、有機極性溶媒、ポリアリーレンスルフィドだけでなく、それ以外の化学成分が含まれたものである。原料にジハロ芳香族化合物とアルカリ金属硫化物を用いた場合における、スラリー中の前記それ以外の化学成分としては、金属イオンに解離しうる反応副生物が代表的である。

【0061】反応終了後、得られた有機極性溶媒とPASを含むスラリーをそのまま、あるいは反応溶媒(もしくはそれと同等の低分子重合体の溶解度を有する溶媒)を加えて攪拌した後、そのままの温度あるいは冷却しそ

のまま、あるいは反応溶媒(もしくはそれと同等の低分子重合体の溶解度を有する溶媒)を加えて攪拌した後、スラリーのpHが7を越えるように、好ましくは7を越え9以下になるように無機酸及び/または有機酸を加え、均一化する。

【0062】なお、スラリーのpHは、水で希釈せず直接測定し、本発明では50℃で測定した値を用いるものとする。スラリーのpHは、既知の各種方法、pHメーターを用いる方法、pH試験紙を用いる方法、指示薬を用いる方法等で測定すれば良い。その中でも特に、pHメーターを用いる方法が操作性等から最も好ましい。

【0063】本発明で使用する酸に特に制限はないが、無機酸としては、例えば塩酸、硫酸、亜硫酸、磷酸、硝酸、亜硝酸等が挙げられ、その中でも塩酸、硫酸、磷酸が好ましい。また、有機酸としては、例えば蟻酸、酢酸、プロピオン酸等の飽和脂肪酸、アクリル酸、クロトン酸等の不飽和脂肪酸、安息香酸、フタル酸等の芳香族脂肪酸、蔥酸、マレイン酸、アジピン酸等のジカルボン酸、パラトルエンスルホン酸等のスルホン酸等が挙げられる。その中でも蟻酸、酢酸、蔥酸が好ましい。

【0064】本発明においては、無機酸及び/または有機酸を加えることは必須であるが、pHを7以下にしてはいけない。スラリーのpHを7以下にしてしまうと得られるポリマーを溶融した際に着色が著しい等、ポリマーの物理性からも好ましくないし、またpHを低くすると高価な酸対応の機器を使用する必要がある。

【0065】酸を加え、かつ加えた後のpHを7より大きくすれば、金属イオン含有量が少なく、かつ溶融時のカラー等の物性にも優れるPASを酸対応していない装置でも製造できる。

【0066】スラリーに酸を加え均一化した後、当該スラリーを濾過する。濾過する温度は特に制限はないが、好ましくは50℃以上で反応に使用した溶媒の常圧での沸点以下、更に好ましくは100℃以上190℃以下の温度である。

【0067】この濾過としては、例えば濾過機、遠心分離機等を用いて固液分離する操作が挙げられ、この濾過後、得られた固体分をそのまま後述の方法で水洗処理してももちろん良いが、該スラリーを濾過した後、固体分に付着した母液を、加温された溶媒にて更に洗浄して、母液の付着分を除去した方がより好ましい。

【0068】この母液付着分を除去する量は、洗浄する前に付着していた母液に対して50%以上、好ましくは70%以上、更に好ましくは90%以上である。この除去量が多いほど、溶融時のカラー等の物性に優れる。

【0069】得られた該固体分はそのまま水洗してももちろん良いが、例えばアセトン、メチルエチルケトン、アルコール類などの溶媒で1回または2回以上洗浄した後水洗しても良い。溶媒洗浄したあるいはしていない固体分は、1回または2回以上水で洗浄する。この水洗工

程では、少なくとも1回以上高温で水洗する。

【0070】この高温で水洗する温度は、通常100℃以上、好ましくは160℃以上、更に好ましくは190℃以上である。このように高温で水洗を行うと、本発明の目的の1つである金属イオン含有量低減化が効果的に行える。

【0071】水洗後、乾燥して目的とするPASを得る。乾燥は、単離したPASを実質的に水等の溶媒が蒸発する温度に加熱して行う。乾燥は真空下で行なっても良いし、空気中あるいは窒素のような不活性ガス雰囲気下で行なってもよい。

【0072】得られた重合体は、そのまま各種成形材料等に利用できるが、空気あるいは酸素富化空气中あるいは減圧化で熱処理することにより増粘することが可能であり、必要に応じてこのような増粘操作を行なった後、各種成形材料等に利用してもよい。

【0073】この熱処理温度は処理時間によっても異なるし処理する雰囲気によっても異なるので一概に規定できないが、通常は180℃以上で行なうことが好ましい。熱処理温度が180℃未満では増粘速度が非常に遅く生産性が悪く好ましくない。熱処理を押出機等を用いて重合体の融点以上で溶融状態で行っても良い。但し、重合体の劣化の可能性あるいは作業性等から、融点プラス100℃以下で行なうことが好ましい。

【0074】本発明により得られた重合体は、従来のPAS同様そのまま射出成形、押出成形、圧縮成形、プロー成形のごとき各種溶融加工法により、耐熱性、成形加工性、寸法安定性等に優れた成形物にすることができる。しかしながら強度、耐熱性、寸法安定性等の性能をさらに改善するために、本発明の目的を損なわない範囲で各種充填材と組み合わせて使用することも可能である。

【0075】充填材としては、繊維状充填材、無機充填材等が挙げられる。繊維状充填材としては、例えばガラス繊維、炭素繊維、シランガラス繊維、セラミック繊維、アラミド繊維、金属繊維、チタン酸カリウム、炭化珪素、硫酸カルシウム、珪酸カルシウム等の繊維、ウォラストナイト等の天然繊維等が使用できる。また無機充填材としては、硫酸バリウム、硫酸カルシウム、クレーパイロフェライト、ペントナイト、セリサイト、ゼオライト、マイカ、雲母、タルク、アタルパルジヤイト、フェライト、珪酸カルシウム、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、ガラスピース等が使用できる。

【0076】また、成形加工の際に添加剤として本発明の目的を逸脱しない範囲で少量の、例えば離型剤、着色剤、耐熱安定剤、紫外線安定剤、発泡剤、防錆剤、難燃剤、滑剤、カップリング剤を含有せしめることができる。

【0077】更に、同様に下記のごとき合成樹脂及びエラストマーを混合して使用できる。これら合成樹脂とし

ては、ポリエステル、ポリアミド、ポリイミド、ポリエーテルイミド、ポリカーボネット、ポリフェニレンエーテル、ポリスルフォン、ポリエーテルスルфон、ポリエーテルエーテルケトン、ポリエーテルケトン、ポリアリーレン、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリ四フロエチレン、ポリ二フロエチレン、ポリスチレン、ABS樹脂、エポキシ樹脂、シリコーン樹脂、フェノール樹脂、ウレタン樹脂、液晶ポリマー等が挙げられ、エラストマーとしては、ポリオレフィン系ゴム、弗素ゴム、シリコーンゴム、等が挙げられる。

【0078】本発明の重合体及びその組成物は、従来の方法で得られるPAS同様耐熱性、寸法安定性等が優れるので、例えば、コネクタ・プリント基板・封止成形品などの電気・電子部品、ランプリフレクター・各種電装品部品などの自動車部品、各種建築物や航空機・自動車などの内装用材料、あるいはOA機器部品・カメラ部品・時計部品などの精密部品等の射出成形・圧縮成形、あるいはコンポジット・シート・パイプなどの押出成形・引抜成形などの各種成形加工分野において耐熱性や成形加工性、寸法安定性等の優れた成形材料あるいは繊維、フィルムとして用いられる。

【0079】以下に本発明を実施例により更に詳細に説明するが、本発明はこれら実施例にのみ限定されるものではない。

【0080】

【実施例】以下、実施例等で使用する原料について、予め説明する。

【0081】1. スルフィド化剤（アルカリ金属硫化物）

30 結晶硫化ナトリウム（5水塩）（以下、Na₂S・5H₂Oと略称する）は、三協化成（株）製品を使用。

【0082】2. 溶媒

N-メチルピロリドン（以下、NMPと略称する）は、三菱化学（株）製品を使用。

【0083】3. ジハロ芳香族化合物

p-ジクロルベンゼン（以下、p-DCBと略称する）は、住友化学（株）製品を使用。

【0084】4. 水

40 水道水を蒸留した後、イオン交換を施したもの（金属イオン含有量5ppm以下）を使用。

【0085】5. 硫酸

硫酸は98%のキシダ化学（株）製の特級を使用。

【0086】6. 塩酸

硫酸は35%のキシダ化学（株）製の特級を使用。尚、上記%はいずれも重量%である。

【0087】〈物性評価〉また、得られた重合体の溶融粘度（η）は、高化式フローテスターを用いて測定した（316℃、剪断速度1000/s、ノズル孔径0.5mm、長さ1.0mm）。得られた重合体のナトリウムイオン含有量はポリマーを焼成した残存物を水溶液とし、

原子吸光高度計にて測定した。pHは横川電機(株)製pHメーターModel PH82とKC1補給型複合電極を用いて測定した。カラーはポリマーを330°Cで5分溶融混練してペレット化し、そのペレットを用いて320°Cでプレスして、膜厚2mmにシートを作成し、そのシートのカラーを測定した。なおL値にて評価した。

【0088】[参考例1]

スラリーの調製：温度センサー、精留塔、滴下槽、滴下ポンプ、留出物受け槽を連結した攪拌翼付10リットルオートクレーブにNa₂S·5H₂O 2185.6g(13.0モル)、NMP 4461g(45.0モル)を仕込み、窒素雰囲気下、200°Cまで昇温することにより水-NMP混合物を留去した。留出液中の組成はNMP 258g、水 903g、イオン性硫黄85mmolであった。

【0089】系を閉じ、ついでこの系を220°Cまで昇温しp-DCB 1911.0g(13.0モル)をNMP 1300gに溶かした溶液を2時間かけて一定速度で滴下した。滴下終了後、220°Cで3時間保持した。この後、250°Cまで1時間かけて昇温し、その温度で1時間保持して反応を終了した。反応終了後、室温まで冷却した。

【0090】得られたスラリー500gを5リットルの水に注いで50°Cで1時間攪拌した後、濾過した。このケーキを再び5リットルの50°Cの水で1時間攪拌、洗浄した後、濾過した。この操作を4回繰り返し、濾過後、熱風乾燥器で一晩(120°C)乾燥して白色の粉末状のPPSポリマーを78gを得た。

【0091】得られたポリマーの溶融粘度は460ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は830ppmであった。シートのL値は57.2であった。

【0092】[実施例1]参考例1で得られた重合スラリー250gに硫酸0.4gを加えスラリーのpHを7.8に調整した。なお、硫酸添加前のスラリーのpHは12.3であった。pHを調整したスラリーを窒素雰囲気下、攪拌しながら150°Cまで加温し、10分間その温度で保持した後、その温度で特製の保温可能な吸引濾過装置で濾過を行った。濾材には330メッシュのステンレス(SUS304)製の金網(直径125mm)を使用した。なお濾過前後において、濾材には腐食等の変化が全く認められなかった。

【0093】ケーキは予め150°Cに加温したNMP 200gで2回洗浄した。更にこのケーキを2000gの水に加え50°C1時間攪拌、洗浄した後、濾過した。この操作を4回繰り返した。但し、4回行う水洗の内3回目の水洗を120°Cで行った。

【0094】水洗濾過後、熱風乾燥器で一晩(120°C)乾燥して白色の粉末状のPPSポリマーを36g得た。得られたポリマーの溶融粘度は550ポイズであ

り、ナトリウムイオン含有量は180ppmであった。シートのL値は63.1であった。

【0095】[実施例2]4回行う水洗の内3回目の水洗を170°Cで行うようにした以外は、実施例1と同様に行った。得られたポリマーの溶融粘度は540ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は130ppmであった。シートのL値は64.0であった。

【0096】[実施例3]4回行う水洗の内3回目の水洗を200°Cで行うようにした以外は、実施例1と同様に行った。得られたポリマーの溶融粘度は530ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は110ppmであった。シートのL値は64.1であった。

【0097】[実施例4]硫酸の代わりに塩酸0.8gを用いた以外は、実施例3と同様に行った(塩酸を加えた後のスラリーのpHは、添加前より低かったが7を越えていた)。得られたポリマーの溶融粘度は540ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は120ppmであった。シートのL値は64.2であった。

【0098】[実施例5]スラリーを濾過する温度を80°Cにする以外は、実施例3と同様に行った。得られたポリマーの溶融粘度は540ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は130ppmであった。シートのL値は64.8であった。

【0099】[比較例1]硫酸を添加せずに実施例1と同様に行った。得られたポリマーの溶融粘度は590ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は500ppmであった。シートのL値は63.3であった。

【0100】[比較例2]硫酸の加える量を1.6gに代える以外は、実施例1と同様に行った。硫酸を加えた後のスラリーのpHは3.2であった。得られたポリマーの溶融粘度は500ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は150ppmであった。シートのL値は54.9であった。実施例1のポリマーに比べて著しく着色していた。また、150°Cでの濾過に用いた濾材が著しく腐食していた。

【0101】[比較例3]4回行う水洗を全て50°Cで行うようにして実施例1と同様に行った。得られたポリマーの溶融粘度は570ポイズであり、ナトリウムイオン含有量は300ppmであった。シートのL値は63.0であった。

【0102】

【発明の効果】本発明の精製方法は、反応終了後のスラリーに無機酸及び/または有機酸を加えスラリーのpHを特定範囲にコントロールして濾過し、特定温度以上で水洗するので、金属イオン含有量が少なく、溶融後のカラー等の物性に優れるPASが得られるという格別顕著な効果を奏する。しかも精製方法上においても、添加する酸等の性質を考慮した装置は必要なく、比較的簡便な装置で、前記した優れたPASが製造できるという格別顕著な効果を、同時に奏する。